

メキシコ自動車産業の民族誌 —ラゴス・デ・モレノ市工業団地のグローバル化

林 和宏

はじめに

筆者は、メキシコ進出のある日系企業の拠点立上げからかかわってきた。そこには単なる日本文化とメキシコ文化の接触であるとはいえない複雑な文化の交流がある。それは初の海外、あるいは東南アジアでのベテラン、工場出身の経営層など、日本人出向者の背負うバックグラウンドとともに、メキシコ人労働者自身に交錯する階級、学歴、年齢、ジェンダー、出身地域、宗教などといった人間分節が織り成す異種混交の文化の生成や、誕生を見て取れる。

こうした文化の混交については、多くの研究蓄積がある。トランプ大統領就任でさらに注目を浴びようになった墨・米国境問題であるが、合法・非合法を問わず国境を越える人の動き、そしてそれによって生じる文化の交流などは、文化人類学の論じる文化混交の代表的な事例として膨大な研究成果が発表されている。海外拠点の立ち上げから新規顧客開拓の一連を経験したなかで直面した異文化の交流、衝突、あるいは交渉につき、メキシコ・日本文化の交流というマクロな視点からの文化交流とともに、現地で生じる日々のミクロな文化混交につき記述したいと考える。

1 開発の進むラゴス・デ・モレノ市

本稿の舞台となるハリスコ州ラゴス・デ・モレノ

市(Lagos de Moreno, 以下ラゴス市)は、バヒオ地区(Bajío)と呼ばれる自動車産業集積地帯の周縁に位置する。ラゴス市はハリスコ州に所在し、自動車産業集積地である中央高原地帯に位置する。

ラゴス市の中心部にある大聖堂やその周辺の街並みは世界遺産にも登録されており、2012年11月には、メキシコ政府の観光開発プロジェクトの一環でもある「マジカルな街(Pueblo Mágico)」にも指定されている田舎町の観光地である。観光による収入と同時に、1944年からスイスのネスレ社の大規模な工場が操業するなど、農牧畜産業がおもな収入源となっている。メキシコを代表するグローバル企業であるシグマ・アリメントス社も同地で乳製品の加工を行っている。ペニャ・ニエト大統領は、就任時よりこのラゴス市への工業団地建設を公約のひとつとして掲げ、企業進出が一段落した2017年7月には工業団地設立3周年を記念し、団地を訪問している。

2 異文化接触空間としての「工業団地」

筆者は、このラゴス市の工業団地内に進出した日系企業に、営業マーケティング部門の責任者として着任した。当然、通訳として日本人出向社員とメキシコの現地社員とのあいだの橋渡しもすることとなる。冒頭にふれたように、酪農と観光で成り立ってきた小さなこの街では、2018年に実

施される大統領選挙で誰が当選しようが自らの生活にはさしたる影響はないとする者がほとんどである。ましてや、隣国の米国に誕生したトランプ政権のもと、北米自由貿易協定 (NAFTA) の代表団による4度の「再交渉」が暗礁に乗り上げ、結論が2018年に持ち越しとなる状況下で、自らが生産や検品に携わった製品がどこの誰のもとに運ばれていくのかも知らない者が大半なのである。TOYOTAが日本企業であることを知らない者に筆者も驚かされたが、頑丈で修理が要らないという実利が重要で、その国籍がどこだろうが関係ないユーザーがいるのも、確かに当たり前といえば当たり前である。

そんな小さな街もグローバル化の波にさらされている。ダウンタウンのレストランやホテルでは日本語のメニューも登場し、片言ながら日本語を話す店員などもみかける。あるホテルのオーナーに請われて、筆者も国道沿いに設置する広告看板の監修をしたことがある。ラゴス市に所在

するメキシコ屈指の教育機関であるグアダラハラ大学も、工業団地に進出した企業の国籍を念頭に、日本語、ドイツ語、英語を軸とする外国語・文化学部を開設した。団地内の工場の建設が進むと同時に、どこからともなく朝食、昼食を販売する屋台や駄菓子、アイスクリーム、タマルと呼ばれる朝食を売る者たちが現れるが、筆者も「日本人に合わせて料理するから日本人の好むメニューを教えてくれ」などとしばしば聞かれる。実際、市内のホテルでは日本人女性社員を週末に招いて日本食料理教室等も催されると聞く。日本人出向者、出張者を新たなマーケットとする生き残り戦略であろう。

筆者は、総務人事責任者を兼任するため、人材のリクルート活動、採用面接、採用後の労務管理なども行っている。そこで直面するのが階級社会としてのメキシコである。教育機会の不平等が指摘されるラテンアメリカ諸国であるが、ここラゴス市もその例からもれない。オフィスで勤



工業団地への入場を容易にする高架橋工事の様子 (筆者撮影)

務する社員は、自らを「学士」「エンジニア」と認識し、オペレーター職との差異化を行う。面接や出勤でこれらスタッフ職が自らの乗用車で会社を訪れるのに対し、オペレーター職はまず公共交通機関である。日本の工場では、高校卒業の職人が管理職として本社の若手営業を叱りつけるなどということはよく聞かすが、こちらではどうも様子がちがう。予断ではあるが、こちらでは大卒が日本と同様の形式の履歴書を持参するのに対し、オペレーター職の応募書は「職業応募書」と呼ばれ、そもそも様式が異なる。そう、入口からすでに異なるのだ。

500通程の履歴書の分析で最も顕著なのは、オペレーター職の女性の大半がいわゆる未婚の母なことである。これに対して大卒女性のなかに子供のいる女性はひとりもいなかった。むしろ履歴書を持参した大学卒業者の大半が卒業後間もないあるいは在学中で、年齢が相対的に若いことにもよるが、こうしたオペレーター職の未婚女性の大半が若年出産を経験している。これには教育水準やそれに基づく将来設計の有無、あるいはカトリック的宗教背景があるように思われる。

メキシコ人といっても両者の考え方や文化的背景は異なるため、まるで異なる言語で語りかけるような人間関係が必要となる。管理職のメキシコ人に「自分の身の回りや公共空間の整理整頓・清掃を」などと呼びかけても埒が明かない。家政婦が掃除や料理をする環境で育った彼(女)達は、「それは私の仕事ではない」とする。息子の通うメキシコシティの日本人学校メキシココースでも「教室の掃除をさせるために高い授業料を払っていない」との苦情から生徒による清掃は廃止されたと聞く。

3 交錯するグローバル諸文化

工場で交錯する文化の諸相は、単にこうしたミクロな人間関係にとどまらない。今やサプライチェーンは軽々と国境をまたぐ。筆者の所属する会社の顧客もサプライヤーも、アジア、メキシコ、米国など雑多である。筆者所属の会社も、テキサス州の営業拠点に納品後、そこから受注とともに発送している。しかし、9月に米国テキサス州を中心に大被害をもたらしたハリケーン「ハーヴェイ」の際、テキサス拠点から顧客の米国工場への出荷が不可能となり、メキシコおよび日本から緊急に直接出荷することとなった。もはやメキシコの地方の工場もグローバルサプライチェーンのなかに組み込まれ、厳格な納期を無視できない。結局その日、数時間遅れで深夜1時に着いたトラック運転手に、「やっぱりメキシコ人は」という言葉が出そうになったが、時間どおりに通関を切ったのを確認した私は、「やればできるじゃない」とふと思った。定時には1分とたがえず帰宅する現地社員のひとりが、夜中に工場まで飛んで来てくれたのが印象深い。

グローバルな品質・環境対応を証明できる国際標準として、最もわかりやすいのがISO(国際標準化機構)の品質や環境に関する規格であるが、当地で欧米系の完成車メーカーと商売するには、日本ではなじみがない別の国際規格の取得が要求され、驚く。たいがいは日本でのノウハウに従い、ISOから開始する。メキシコに出向してくる部品メーカーその他の日本人の多くが、タイやベトナムといった東南アジアで工場の立ち上げを経験してきた者や、米国で経営ポジションにあった者などが多く、手馴れたものである。同時に、工場の文化はあくまでも日本標準を参照項としながらも、「タイではね」という語り口を何度か聞いたこ

とがある。彼らはこうしたグローバルな標準規格とともに、各国現地でのローカル規則を念頭にルール作りやそれに対応した人材育成が必要であると理解している。ここでは、メキシコを舞台に日本のみならず東南アジアの経験が混ざり合った会社文化が醸成されているのである。メキシコで日本語を話す人材が不足しているため、工業団地内に日本から南米スペイン語圏出自の日系人が多く還流するなどの、国際移民現象の新たな展開もみられる。



地元消防局による避難訓練の様子（筆者撮影）

同時に、メキシコ国内規格NOM規格へのケアも必要である。工場内外の指示板、危険表示、消防訓練実施記録など、定期監査を受けないと罰金や工場閉鎖に至るのである。

おわりに

みてきたように、業団地の現場は、単一の日本企業文化、工場労働文化、メキシコ人社員などといった文化の語りが容易でないことを如実に語っている。

文化人類学者ジェームス・クリフォードは、欧米文化や外資の侵入によりその「オリジナル」な文化が消滅していくとの見方を「エントロピックな語り」と言う。日本企業の一員としてラゴスの「近代化」の一翼を担うその活動こそがもしかしたらラゴスの古きよき文化を破壊しているのではないかと、この理解と言える。無論、この言説自体が、メキシコ在住の社会学者ガルシア・カンクリーニの指摘の如く、「近代への異なった入り口」を模索しつつ、外からの文化と交渉し、それを馴化して異種混淆な文化を作り上げていくとする住民達の営為を無視していると言えなくもない。

ラゴス市を拠点に営業活動する者として、工場的发展を通じた地域経済発展を望みつつも、この穏やかな田舎町の維持を願う心も片隅にある。不可避となったグローバル化の果実が、広く地域住民に享受されることを祈るばかりである。

（はやし・かずひろ／元外務省専門調査員）